

イエスはなぜ 4 日も遅れたのか

主はこう言われます。

「わたしの思いは、あなたたちの思いと異なり、わたしの道はあなたたちの道と異なる。天が地を高く超えているように、わたしの道は、あなたたちの道を、わたしの思いはあなたたちの思いを、高く超えている」イザヤ 55 章 8～9 節

ラザロという人物が、もうろうとする意識の中で、イエス・キリストが来られるのを待っている場面が聖書の中に出てきます。彼は突如重篤な病魔に襲われて、非常に危険な状態にありました。そのかたわらでは、二人の姉マルタとマリアがラザロの手を握り、「もうすぐイエス様が来られるから大丈夫よ」と言いながら、ラザロを励ましていたことでしょう。姉妹はラザロが危ないからすぐに来て欲しいと、イエス様のもとへ使いを走らせていたのです。ラザロは苦しそうにはハアハアと肩で息をしています。マルタは気が気ではなく、イエス様はまだ来られないのかと何度も外に出ては様子を見に行っただけに違いありません。しかし、この一刻の猶予もないときに、イエス様はなかなか来られないのです。イエス様にラザロが大変な状況にあることを伝えたはずなのに、どうしてすぐに来て下さらないのか。ラザロも二人の姉妹も、イエス様を心から信頼していましたし、またイエス様から深く愛されていることも知っていました。それなのに、イエス様を一番必要としているときに、主はおられないのです。そうこうしているうちに、ラザロの容態は急変し、イエス様が来られるのを最後まで待ちつつ、ついに力尽き

てしまいます。なんとイエス様は間に合わなかったのです。そして、イエス様が彼らのもとにやってきたのは、ラザロが亡くなってから実に 4 日も経っていたことでした。

なぜ、イエス様は 4 日も遅れたのか。これが今朝のメッセージのテーマです。わたしたちは大きな困難に直面したとき、神様の助けを必死に祈り求めることでしょう。昼も夜も、時には食を絶ち、徹夜で祈ることもあるかもしれません。それなのに、神様はまるで沈黙されているかのように、すぐに応えて下さらないことが多いのです。このことが多くの人を悩ませます。神様を愛し、信じているからこそ、余計に一体なぜなのかと戸惑い、信仰を失ってしまいそうになる人も少なくありません。わたしたちはこのような神様がまるで沈黙されているように感じられるとき、これをどう理解し、どう対処したら良いのでしょうか。本日は、そのようなことをラザロの物語からご一緒に考えてみたいと思っています。

以前、軽井沢で行われた修養会に参加していた時のことでした。明け方に信徒の方が亡くなったとの知らせが入り、急遽修養会を切り上げて帰ることになったのですが、当時まだ携帯電話があまり普及していないころだったので、わたしと連絡がつくまでに随分と時間がかかってしまったようです。また、山奥のへんぴな場所にいたものですから、教会に戻るまでにもかなり時間がかかってしまいました。ご遺族は愛する家族を亡くされた悲しさや、葬儀の手はずのことなどが心配で気が気ではなく、「どうして肝心なときに牧師が教会にいないのか」

「どうしてもすぐに連絡を取ることができないのか」と取り乱す場面もありました。電話で葬儀社との簡単な打ち合わせをし、すぐに戻ることをお伝えして安心してもらいましたが、こういうことは長年牧師をしていると時々起こります。物理的にどうすることもできないことは分かっている、いて欲しいときにいないということで不安になり、一刻も早く戻って来て欲しいと強く願われるのは当然のことでしょう。

たとえば病院などでは、さらに一刻を争いますので、当直の医師や看護師などは呼ばれたらすぐに駆け付けることができるように待機しなければならないオンコールと呼ばれるシステムがあります。また、救急車に連絡を入れれば、すぐに駆け付けてくれます。そのようにして毎日の生活が少しでも不安なく送ることができるように、わたしたちは守られているわけです。

これと同様に、神様も祈り求めればすぐにでも天使を遣わして助けてくれると、素朴に信じていくのが信仰です。神様は祈る前から私たちの必要を何もかもご存知であると聖書に書かれているのですから、なお一層、神様に守られているのだと安心して良いはずなのです。ところが、現実にはそのように感じられないことが少なくないのです。ラザロの物語は、まさにそのような場面から始まります。

「ある病人がいた。マリアとその姉妹マルタの村、ベタニアの出身で、ラザロと名を呼ぶ。このマリアは主に香油を塗り、髪の毛で主の足をぬぐった女である。そ

の兄弟ラザロが病気であった。姉妹たちはイエスのもとに人をやって、「主よあなたの愛しておられる者が病気なのです」と言わせた。イエスは、それを聞いて言われた。「この病気は死で終わるものではない。神の栄光のためである。神の子がそれによって栄光を受けるのである。」イエスは、マルタとその姉妹とラザロを愛しておられた。ラザロが病気だと聞いてからも、なお二日間同じ所に滞在された」ヨハネ 11:1～6

マルタとマリアの大切な弟ラザロが、死にそうな状況にありました。だから、使いを送って「主よ、あなたの愛しておられる者が病気なのです」と伝えたのです。そのように伝えれば、すぐに来てくれると思ったのです。ところが、イエス様は「ラザロが病気だと聞いてからも、なお二日間同じ所に滞在され」（ヨハネ 11:6）なのです。なぜイエス様はのんびりしておられるのでしょうか。まるで、イエス様はわざとラザロのもとに行くのを遅くらせているかのようです。いったいこれはどういうことなのでしょう。

日本人は世界的に、時間に正確な国民ということで知られています。時計をいつも気にしており、時間に遅れそうなときは必死に走り、新幹線は 1 分遅れただけでも謝罪します。ところが、日本人が時間に正確な国民という評価は、実は正しくないという指摘もあります。ある外国人が、日本人は始まる時間にはうるさいのに、終わる時間は適当というか、遅れてもあまり気にしないと言っていました。そう言われればその通りで、たとえばアメリカの学校では終わりの

ベルがなると生徒たちはさっと教科書をかばんにしまいますが、日本では教師は終わりというまで続きます。仕事もサービス残業は当たり前とっていますし、会議はいつ終わるかもわかりません。本来あるはずの 1 時間のお昼休憩が、時間給はしっかり 1 時間分差し引かれているのに、10 分ほどしかないという職場も少なくありません。つまり、何が言いたいかという、日本人には日本人の時間感覚があるということです。

そのような観点から神様を見ることはできないでしょうか。つまり、神様には神様の時間感覚があるということです。神様の救いが遅れていると感じることがあったとしても、それはその人の時間感覚でのことであって、神様の時間では決して遅れているわけではないということです。聖書は神様の時について、また神様がなされることについて、いくつもの重要なことを教えています。

たとえば、伝道の書 3 章 11 節には、「神のなされることは皆、その時にかなって美しい」と書かれてあります。わたしたちがどのように感じようとも、神様がなされることはすべて、1 分たりとも早すぎたり、遅すぎたりすることなく完璧なタイミングでなされるのです。そのあまりにも美しく、その時にかなった神様のみ手の業を見たとき、わたしたちは圧倒され、誰もが主は生きておられることを知るのです。

また、イザヤ書 55 章 8 節では、「わたしの思いは、あなたたちの思いと異なり、わたしの道はあなたたちの道と異なると主は言われる。天が地を高く超えているように、わたしの道は、あなたたちの道を、わたしの思いはあなたたちの思い

を、高く超えている」と教えられています。

わたしたちが知らなければならないことは、神様の思いと私たちの思いが異なり、神様がなさろうとしておられることと、わたしたちが期待していることとが異なることがあるということです。そしてその場合、神様の思いは私たちの思いをはるかに超え、神様のなさろうと思っていることは、わたしたちが期待していることより、はるかに高いのです。

このみ言葉を正しく理解するなら、わたしたちが神様に対して、「なぜですか」と思うようなことがあるのは当然なことなのです。しかし、わたしたちがどのように感じようとも、それはわたしたちの想像を超えるほど素晴らしいことが起ころうとしていることを意味しているのです。わたしたちは常に神様の時間と御計画の中にあります。神様がわたしたちの時間と計画の中にあるわけではありません。このことを知ることが、神様を中心とした、物事を正しく理解していくために重要なのです。

さて、ラザロが亡くなって4日も経ったあと、イエス様はやって来られたことが、ヨハネ 11:38, 39 からわかります。

「イエスは、再び心に憤りを覚えて、墓に来られた。墓は洞穴で、石でふさがれていた。イエスが、「その石を取りのけなさい」と言われると、死んだラザロの姉妹マルタが、「主よ、四日もたっていますから、もうにおいます」と言った」

ところでなぜ、4日間イエス様は遅れたのでしょうか。イエス様は墓の中に3日

間おられ蘇られましたから、ラザロの場合も 3 日であればわかりやすいのですが、3 日より 1 日多い 4 日なのです。聖書に出てくる日数には意味があることが多いのですが、4 日という日数は他では見つけることができません。祈禱会のメンバーとそのようなことを話していましたが、ある方が亡くなって 1 日、2 日程度であれば、体もまだ綺麗だろうからイエス様の力によって甦らせることを期待することもできたかもしれないが、4 日も経過して体も腐り始めていけば、その状態から復活させるのはイエス様でも難しいのではないかと、より信仰が問われるからではないかと言われました。確かに、そうかもしれません。

では、マルタとマリアはイエス様が 4 日も遅れたことに対して、どのように感じたのでしょうか。いみじくも、二人の姉妹は同じことをイエス様に言っています。それは「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに」という言葉でした。この言葉の奥には、「どうして一番そば近くにいて欲しいときに、いてくださらなかつたのですか」「どうして私たちの必死な望みに、耳を傾けて下さらなかつたのですか」という思いが込められているように感じられます。

しかし、今見てきたように、イエス様が考えておられた最善の時と方法は、マルタやマリアが望んでいたものとは異なっていたということなのです。マルタとマリアが思ったように、決してイエス様が来られるのが遅れたわけではなく、その時点でもなお、神様の時の中にあつたのです。ここが私たちが最も知らなければならぬ重要なポイントなのです。何があつたとしても、常にわたしたちは

神様の時の中にいるということです。神様がわたしたちの時の中におられるのではなく、わたしたちが神様の時の中にいるのです。

さらに、最初にラザロのことがイエス様に伝えられたとき、すぐにイエス様が語られた言葉にも注目しなければなりません。

「この病気は死で終わるものではない。神の栄光のためである。神の子がそれによって栄光を受けるのである。」ヨハネによる福音書 11 章 4 節

「この病気は死に終わるものではない」と、ラザロの死を遠回しに予告していたのです。神様の時とご計画の中では、ラザロは死ぬことになっていたということです。しかし、その死が、神様の栄光となると続けられました。いったいどのような形で神様の栄光となるのか、ここではまだはっきりと語られていませんが、それゆえラザロの病気は単なる死で終わるものではないと語られたのです。

このイエス様が語られた短い言葉の中には、わたしたちに対する重要なメッセージも含まれています。それは通常人間は死をもってその命を終えると多くの人は考えています。しかし、神様を信じている者たちにとっては、死は決して終わりではないということです。終わりどころか、それは永遠の命の始まりとなるのです。それゆえ死は父なる神様の、そして御子イエス様の栄光となります。

使いの者は、急いでこのイエス様の希望の言葉をラザロと二人の姉妹に伝



えました。しかし、目の前の不安と恐れを前に、二人の姉妹はしっかりとイエス様の言葉を受け止めることができなかつたようです。「主よ、四日もたっていますから、もうにおいます」と言ったマルタの言葉に対して、イエス様は「もし信じるなら、神の栄光が見られると、言っておいたではないか」と言われます(ヨハネによる福音書 11章 40節)。

わたしたちも聖書の御言葉を通して神様の希望の約束を聞いても、いざ目の前に大きな試練や困難起こったり、この世の常識に支配されると、その約束の御言葉がどこかに吹き飛んでしまうことがあるのではないのでしょうか。二人の姉妹もそのような感じだったのでしょう。

ところで興味深いのは、「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに」とイエス様に語ったマルタとマリアでしたが、その後の二人のとった行動や言葉がまるで違っていたことです。マルタは、このように語った後、「しかし、あなたが神にお願いになることは何でも神はかなえてくださると、わたしは今でも承知しています。」(ヨハネ 11:22)と、消えかかった信仰を奮い立たせています。しかし、妹のマリアはただイエス様の足元にひれ伏して泣くだけでした。2人の姉妹の性格の違いがよく現れています。

この2人の姉妹に対して、イエス様はまずマルタには、「わたしは復活であり命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか」(ヨハネ 11:25)と問われます。イエス様はラザロの死によって消えかかっているマルタの信仰を、もう一

度試され、引き上げようとされていることがわかります。マルタはこの問いかけに対して、「はい、主よ、あなたが世に来られるはずの神の子、メシアであるとわたしは信じております」と答えます。

しかし、足元で泣いているマリアに対しては、泣いているのをご覧になって、「心に憤りを覚え」られたと書かれてあります。何に対してイエス様は憤りを覚えたのでしょうか。マリアの不信仰に対してでしょうか。そうかもしれません。しかし驚くべきことに、その後なんと「イエス様も涙を流された」(ヨハネ 11:35)と書かれてあるのです。

「マリアはイエスのおられる所に来て、イエスを見るなり足もとにひれ伏し、「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに」と言った。イエスは、彼女が泣き、一緒に来たユダヤ人たちも泣いているのを見て、心に憤りを覚え、興奮して、言われた。「どこに葬ったのか。」彼らは、「主よ、来て、御覧ください」と言った。イエスは涙を流された」ヨハネ 11:32～35

なぜイエス様も涙を流されたのでしょうか。普通に考えれば、マリアが泣いているのを見て、同情されて流された涙でしょう。ラザロがよみがえることがわかっているからと言って、感情の無いロボットのように平然としておられないところに、わたしたちはほっとするのです。感情は神様が人間に与えて下さった素晴らしい宝物です。人間が神様に似せて創造された以上、感情は神様にも備わっているのです。イエス様の涙を見つめるとき、不信仰だと言う理由だけで憤ら

れたのではないように思えてきます。では、イエス様に何に対して憤られたのでしょうか。イエス様がこのとき見つめておられたのは、人間の前に立ちはだかっている死なのです。人間は死の前になすすべがないのです。人類の最後の敵である死に対して、イエス様の霊は激しく燃え上がっていたのです。ラザロの死に打ちのめされ泣くマリアと、死の悲しみの中にあって何とか信仰を奮い立たせ、「主よ、あなたが神様にお願いして下されば、神様はラザロを復活させてくださることを信じています」とすすがるマルタを見て、愛の主は涙を流されたのです。そして、そのイエス様の愛と憐みから溢れる涙が、ラザロを再び甦らせることになっていくのです。

イエス様が「ラザロ、出て来なさい」と大声で叫ばれると、ラザロは息を吹き返し、墓から出てきます。そこにいた人たちはこれを見て、イエス様を信じたとあります。また、弟子たちにとってもイエス様が救い主であることの確信を強めるものとなりました。そのためにラザロの死は許されたとも書かれてあるのです。しかし、実際にそのラザロを死から甦らせる直接の動機となっていたのは、あるいはイエス様の心を動かしたのは、マルタの小さな信仰とマリアの涙であり、それがイエス様の憐みを引き出していったのです。

わたしたちもイエス様の同じ憐みの中で生きています。時にはマルタのように、それがいかにからし種のように小さかろうとも、信仰を表すことがあるでしょう。しかし、同時にマリアのようにただイエス様の足元で泣くしかないこともあるのです。しかし、どちらも愛と憐み深い主の心を動かすのです。主はどこまでも

憐み深い方だからです。そして、復活と永遠の命が真実であることが、イエス様が流された涙の中に輝いているのです。

わたしたちは神様の時の中に生かされています。わたしたちは常に神様のご計画の中に導かれています。神様がわたしたちの時と計画の中におられるのではありません。わたしたちが神様の時とご計画の中に生きているのです。そして、それはわたしたち思いを遥かに超え、高く、美しいのです。なぜ、そのような素晴らしい神様の時とご計画の中に生きることができるのか。それはただ泣くしかないような弱いわたしたちの、主に対するほんの一握りの小さな信仰と愛が、主の心を動かすからです。それしか言いようがありません。だから、たとえ主の救いが遅れているように感じるがあったとしても、それでもあなたは神様の時の中に生きているということを、忘れないでください。